



令和4～5年度 文化庁委託

「日本語教育の参照枠」を活用した教育モデル開発事業【留学】

〈報告〉

改訂版

～留学分野の日本語教育のカリキュラムを作るために～

一般財団法人 日本語教育振興協会

令和6（2024）年3月29日

令和7（2025）年3月31日改訂

ご挨拶

日本語教育振興協会では令和４～５年度にかけて「『日本語教育の参照枠』を活用した教育モデル開発事業【留学】」を文化庁から受託し、「日本語教育の参照枠」を活用した教育モデルを開発するという前例のない取り組みを実施してまいりました。

委員は、日本語教育の専門家１３名（研究者３名、日本語教育専門家１０名）に委嘱して開発に取り組んでいただきました。この受託期間に委員会を５４回及び試行研修と成果報告会を実施してまいりましたが、正式な委員会以外にも委員自ら参集し、幾度も議論を重ねてまいりました。

江副委員長をはじめ、委員の皆様にはご多忙の中大変なご尽力を賜り、心から感謝申し上げます。

令和６年１月に試行研修を実施した折、受講者の皆様からアンケートを通じて建設的かつ率直なご意見やご感想を賜り、委員一同大変感謝しております。そして今、皆様から頂戴したご意見も参考にしつつ作成した成果がここに公開され、全国の各日本語教育機関の関係者に参考にしていただけるよう供されることとなりました。

ここに公開しました報告内容が各日本語教育機関によって活用していただけるなら、この上ない喜びです。この教育モデルは認定申請のためにそのまま使用できる「見本」ではございませんが、それぞれの教育現場に適した運用ができるよう、委員一同が心を砕いて作成したものです。それぞれの機関の教育内容等によっては少し手間がかかるかもしれませんが、何度も矯めつ眇めつするうちに徐々に理解が深まるものと思われます。

本報告書及び別添の資料で紹介しております「コースフレームワーク」や「モジュールボックス」が、今後、各日本語教育機関の皆様にとって実用的なツールになるものと信じて私の挨拶といたします。

一般財団法人 日本語教育振興協会
理事長 佐藤次郎

はじめに

令和 4～5 年度 文化庁委託『『日本語教育の参照枠』を活用した教育モデル開発事業【留学】』の〈報告〉に当たり、若干の挨拶をさせていただきます。

これは、個人的に申せば、49 年間の日本語教育の経験を基に発言させていただくのですが、「日本語教育で最も重要なことは何か」と問われたら「いくつかあるが、クラスで教えるなら、言語間距離ではないか」と答えたいということです。1987 年に中国、1988 年に韓国がそれぞれパスポートを自由化しました。それまでは中国や韓国の学生は来日していなかったのです。私達の学校にいた学生は、欧米の学生が中心でした。東京には 10 数校しか日本語学校がなかった時代の話です。1983 年、中曽根内閣が留学生 10 万人構想を発表し、中国、韓国のパスポート自由化の追い風を受けて、これらの地域からの日本留学生が爆発的に増えました。するとそれまで想像しなかったことが急増しました。例えば、これは難しいだろうと思って「揶揄する」という言葉の意味を一生懸命説明したところ、欧米人には役に立ったようでしたが、中国の学生も韓国の学生もそれぞれの言語で「言葉も意味も同じだ」と言うのです。歴史的な背景から考えてみれば、台湾や韓国において日本語が流入したのは当たり前で、実は、言語間距離という発想で考えるとこれらの国の近代インフラ系の言葉が、非常に日本語に近いことがわかります。他方、欧米の学生にとって、多くの場合、漢字は全くの未知の学習領域です。これは、学習者の対象が本当に幅広くなったことと無関係ではありません。その結果、例えば、ブラジルの学生で、子供の頃は、お祖父さんの影響で、家庭内では日本語を話していたので、会話は日本語能力試験の N1 に近いのですが、書く能力と言ったら N5 に近いという学習者が出てきたりします。

この度の「教育モデル開発事業」の背景には、「日本語教育の参照枠」があります。そして、それは Cando を基軸にしています。その結果、学習内容が細分化され、「ヨーロッパ言語共通参照枠」を参考に、「聞く、読む、話す、書く、やり取り」の五つの言語活動それぞれに A1 から C2（留学分野では主に B2 を目指す）の能力を段階的に表示するシステムに変更されることとなりました。その結果、先ほどの日系ブラジル人のような学習者の場合は、「書く、読む、やり取り」は A1 のクラスで勉強し、「聞く、話す」は B2 のクラスで勉強するというようなことが起こることは十分に考えられます。その点、この報告書は、従来の、「言語間距離の課題を一切問題にしないで単線的に『初級、中級、上級』」として教えてきたやり方に一石を投じたものであり、今後の日本語教育の発展に寄与するものと思われます。

来年度（2024 年度）に施行される法律に合わせ、多くの日本語教育機関が認定日本語教育機関に申請すると想像されます。私共としては、この報告などを参考にしながら、各校がそれぞれの目標を明確にしつつ、新規の認定に参加していったほしいと思っています。

また、この報告書は本事業委員会の委員が個々の力を発揮しつつ一丸となって仕上げた努力の成果であることを、合わせて最後にご報告申し上げたいと思います。

カリキュラム・シラバス開発検討委員会、教師研修モデル開発委員会
委員長 江副隆秀

〈参考〉

令和4年度「日本語教育の参照枠」を活用した教育モデル開発事業（文化庁）

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/kyoikumodelkaihatsu_boshu/（2024.3.27 最終閲覧）

令和5年度「日本語教育の参照枠」を活用した教育モデル開発事業（文化庁）

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/kyoikumodelkaihatsu/93859201.html（2024.3.27 最終閲覧）

目次

ご挨拶

はじめに

1. 留学分野の日本語教育機関の特徴	1
1.1 留学分野の日本語教育機関の特徴①：「学習者」の特徴	1
1.2 留学分野の日本語教育機関の特徴②：「日本語学習環境」の特徴	2
1.3 留学分野の日本語教育機関の特徴③：「学習・教育目標」の特徴	2
2. 留学分野の日本語教育における「学習・教育の目標」：【3つの力】	4
2.1 「ことばの力」	5
2.2 「まなぶ力」	5
2.3 「つながる力」	5
3. 留学分野の日本語教育のためのカリキュラム	7
3.1 留学分野の日本語教育カリキュラムを作成するための4つのポイント	7
3.2 カリキュラム作成のための2つのツール	8
3.2.1 コースフレームワーク	8
3.2.2 モジュールボックス	13
4. カリキュラム作成のための教師研修	17
4.1 カリキュラム作成のための教師研修の流れ：試行研修「ワークショップ」より	17
4.2 カリキュラム作成のための教師研修を試行した結果：アンケート結果より	22
5. 多様な学習目標・教育目標を保障する視点：「言語活動プロファイル」	27
6. おわりに：成果と今後の課題	31
参考資料	
参考資料①：「日本語教育の参照枠」各種 Can do 一覧	34
参考資料②：カリキュラム作成のためのワークシート	35
参考資料③：参考文献	36
参考資料④：委員一覧	37

1. 留学分野の日本語教育機関の特徴

留学分野の教育モデルを考えるに当たり、就労分野、生活分野とは異なる留学分野の日本語教育機関¹における日本語教育の特徴について、以下の3点から整理しました。

- ①「学習者」の特徴
- ②「日本語学習環境」の特徴
- ③「学習・教育目標」の特徴

1.1 留学分野の日本語教育機関の特徴①：「学習者」の特徴

留学分野の日本語教育機関は、多様な目的と背景を持つ学習者に門戸を開いている教育機関で、さまざまな母語、年齢、国籍、宗教、ジェンダー、学歴、職歴、外国語学習歴等を持つ学習者が在籍しています。各機関の設立目的、設立理念、設立地域の特性等によって、どのような学習者を対象とし、どのような学習者を受け入れるかはそれぞれ異なりますが、例えば、2024年3月現在、次のような学習者が在籍しています。

<多様な学習目的を持つ学習者の例>

- ・日本の高等教育機関（大学、大学院、専門学校等）への進学を目指している人。
- ・日本での就職や起業を目指している人。
- ・日本での中長期滞在や定住を予定しており、日本語力の獲得およびブラッシュアップを求めている人。
- ・日本文化や日本語への関心から日本語を学習している人。 等

<多様な入国／生育背景を持つ学習者の例>

- ・日本語を学ぶために新たに日本に入国してきた人。
- ・既に日本に滞在している外国籍および海外にルーツを持つ人。
- ・海外で生まれ育った日本にルーツを持つ人（日系二世、三世等を含む）。
- ・母国での長期休暇等を利用し、日本体験の一環として日本語を学習する人。
- ・日本の高等学校に入学・編入を希望する人。
- ・難民や避難民。 等

また、留学分野の日本語教育機関に在籍する学習者は、その在留資格も「留学」「特定技能」「技能実習」「家族滞在」「日本人の配偶者等」「定住者」「短期滞在」など多岐にわたります。

このように、留学分野の日本語教育機関は、多様な学習者が共に集い互いに日本語を学び合うことのできる場と機会を提供している教育機関です。

¹ 留学分野の日本語教育機関とは、主に2024年3月現在「法務省告示日本語教育機関」とされている機関を指します（専門学校の日本語学科や大学の留学生別科等も含まれています）。

1.2 留学分野の日本語教育機関の特徴②：「日本語学習環境」の特徴

次に、留学分野の日本語教育機関における日本語学習環境については、次の2点がその特徴として挙げられます。

- ・一定期間にわたり、定期的かつ継続的に日本語を学ぶことができる。
- ・一定期間にわたり、定期的かつ継続的に共に学び合える仲間がいる。

こうした特徴により、留学分野の日本語教育機関では、比較的長い時間をかけてじっくり学習体験を積み重ねていけるようなコースやカリキュラムをデザインすることができます。また、それにより、比較的高いレベル（例、B2以上のレベル）の目標設定も可能となります。

では、母国を離れ、このような環境下で日本語の学びを体験することには、どのような意義があるのでしょうか。その意義は次の3つに集約されると、私たちは考えました。

<日本で「一定期間、定期的かつ継続的に仲間と日本語を学ぶ」という体験の意義>

- ・日本語を基礎から体系的に学び、高度な日本語力を身につけ、社会の幅広い分野で日本語を使った活動ができる。
- ・日本の言語、文化、社会について深く知り、自らの関わりによって自己を充実させたり成長させたりすることができる。
- ・寛容な意識と態度で他者と交わり、よりよい関係性を築く力を身につけることができる。

この3点は、旅行や短期滞在によってもある程度達成することができるかもしれませんが、ですが、中長期にわたって日本に滞在し、さまざまな背景を持つ多様な人々と日常的に交わる中で、より達成されるものと考えられます。ここに留学分野の日本語教育機関で日本語を学ぶ意義と有益性があると思われ、この学習環境こそが留学分野の日本語教育機関の大きな特徴ともいえるでしょう。

1.3 留学分野の日本語教育機関の特徴③：「学習・教育目標」の特徴

上述の通り、留学分野の日本語教育機関では、比較的長い時間をかけて仲間と共に学習体験を積み重ねることができるという学習環境も一助となり、一定程度以上の時間を要するといわれるような能力の育成も可能となります。例えば、次のような力の育成が可能でしょう。

- ・言語知識、言語運用能力 等（ことばの力）
- ・自律学習能力、協働学習能力、自己内省能力、課題解決能力、ICTリテラシー 等
（まなぶ力）
- ・社会文化能力、異文化間能力、対人コミュニケーション能力 等（つながる力）

このように、留学分野の日本語教育機関では、日本語の力の育成に加え、その他さまざまな力を包括的かつ複合的に育成することを学習および教育の目標とすることが可能であるという特徴が挙げられます。

そこで、留学分野の日本語教育機関では、次の【3つの力】を育成することが可能であると同時に、その育成が求められると考え、これを留学分野の日本語教育の「学習・教育の目標」としました。

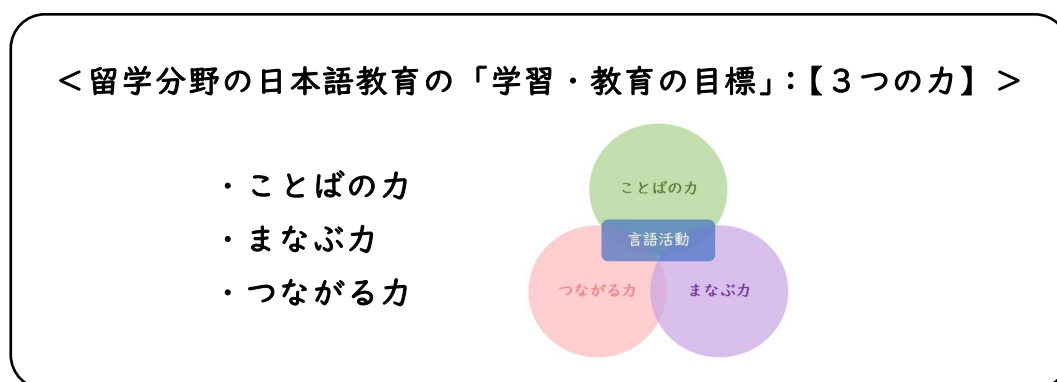


図1 留学分野の日本語教育の「学習・教育の目標」：【3つの力】

なお、この【3つの力】は、「認定日本語教育機関 日本語教育課程編成のための指針（案） 留学のための課程²」（文化庁，2024 年1月現在）の「5－2 留学分野；（5）学習内容」（p. 11）に記されている以下の i)、ii)、iii) ととも整合します。

(5) 学習内容

○ 当該教育課程においては、主に対象とする学習者（生徒）が求められる日本語能力や言語活動と i ～ iii を踏まえ、学習内容、主な手法を計画し、実施する。

i) 日本語能力【必須】

- ・当該教育課程全体で、「日本語教育の参照枠」で示す五つの言語活動（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り、発表）」「書くこと」）を盛り込む。
- ・言語活動を行う上でのコミュニケーション言語方略の重要性を認識し、言語知識の定着にとどまらず、言語の運用能力、言語使用の際の方略（ストラテジー）能力についても学ぶことができる活動を行う。

ii) 学習を自ら管理する能力【必須】

学習者（生徒）が、自分に必要な日本語能力を具体的に意識し、学習計画を立てたり、学習計画を自分に合った方法で管理したり、調整したりすることができるように目指す。

iii) 推奨される学習内容

社会・文化的情報、交流・体験活動、総合学習の要素を学習内容として盛り込む。例えば、地域の人々を始めとする多様な他者との交流、機関内外を問わずさまざまな体験の機会を通して、社会について理解を深め、地域社会との関わりを意識し、社会に参加する意欲姿勢を醸成する機会や時間を設定できることが望ましい。

※当該教育課程の目的や到達目標に照らして、一科目として設定するほか、一部の期間・時間で行うものとして扱う場合があるが、実施にあたっては目的、目標、実施方法、評価方法等についてあらかじめ、当該課程の教育内容として計画する。

ことばの力

まなぶ力

つながる力

11

図2 「認定日本語教育機関 日本語教育課程編成のための指針（案）」より

² 詳細は、以下の URL を参照。

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/93982902_02.pdf (2024.3.2)

2. 留学分野の日本語教育における「学習・教育の目標」：【3つの力】

学習者一人一人が自分の目的・希望・夢を叶えるためには、自分にとって必要な言語活動を、自分が求めるレベルで遂行できることが目標となります。これについて、「日本語教育の参照枠」には、「言語教育観の柱」の一つとして次のように記されています。

3 多様な日本語使用を尊重する

各人にとって必要な言語活動が何か、その活動をどの程度遂行できることが必要か等、目標設定を個別に行うことを重視する。母語話者が使用する日本語の在り方を必ずしも学ぶべき規範、最終的なゴールとはしない。

（「日本語教育の参照枠」 p. 6）

学習者一人一人が日本語を用いて遂行したいと願う「言語活動」を、「日本語教育の参照枠」では「活動 Can do（コミュニケーション言語活動）」および「テキスト Can do」として、各種言語活動別に A1～C2 の言語能力記述文を示しています（「日本語教育の参照枠」 pp. 24-48, p. 54）。

では、留学分野の日本語教育機関に在籍する学習者が求める「活動 Can do（コミュニケーション言語活動）」「テキスト Can do」は、どのような力によって支えられるのでしょうか。それを支えるのが、上述の【3つの力】です（図3参照）。

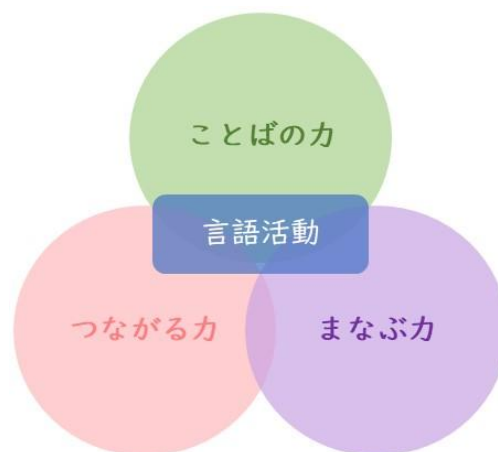


図3 留学分野の日本語教育の「学習・教育の目標」：【3つの力】と「言語活動」

この【3つの力】がそれぞれどのような力であるか、「日本語教育の参照枠」と関連させながら、以下に一つずつ説明します。

2.1 「ことばの力」

日本語を用いてさまざまな言語活動を行う際に必要となる**言語的な力**。

言語の知識と言語を運用する力を含みます。また、より効果的に言語を運用するために、あるいは、たとえ言語的な力が十分ではない場合でも必要な言語活動が行えるよう、言語的な「方略」を適用・活用する力も含みます。

＊この力は、「日本語教育の参照枠」の以下と主に関連しています。

- 能力 Can do（コミュニケーション言語能力）：
 - ・言語能力（pp. 55～60）
 - ・言語運用能力（pp. 62～65）
- 方略 Can do（コミュニケーション言語方略）（pp. 49～53）

2.2 「まなぶ力」

自分自身の学びを自己管理しながら自らの学びを継続していく際に必要となる**自律的・協働的に学ぶ力**。

自分に適した学び方を工夫する力、自ら学びの計画を立てて実行できる力、問題を発見し解決できる力を含みます。また、情報獲得や問題解決のために、他者と協働したり、ICT（AI、IoTを含む）を適切に活用できる力も含みます。

留学分野の日本語教育機関には、高等教育機関への進学を目指す学習者が比較的多く在籍していますが、こうした学習者は日本語教育機関での日本語学習を終えたのちも、引き続き学習活動や研究活動などの「学び」を続けていくことになります。よって、この「まなぶ力」は、日本語学習だけでなく、その先が続くあらゆる学びにも求められる大切な力といえるでしょう。

＊この力は、「日本語教育の参照枠」の以下と主に関連しています。

- 方略 Can do（コミュニケーション言語方略）（pp. 49～53）
- 一般的能力（p. 76）

2.3 「つながる力」

社会に主体的に参入、参加、参画する際に必要となる**社会言語的・言語文化的・社会文化的な力**。

他者／異文化に対する知識や意識、他者／異文化と向き合う態度やスキルを含みます。また、他者／異文化に触れることを通して、自分自身／自文化を再認識できる気づきの力も含みます。

特に留学分野の日本語教育機関では、さまざまな背景や文化を持つ多様な学習者が共に学び合っていますから、学習者は日本語や日本文化以外にもさまざまな言語や文化に日々触れることとなります。そうした環境は、この力の育成を支える大切な場・機会となるでしょう。

＊この力は、「日本語教育の参照枠」の以下と主に関連しています。

- 能力 Can do（コミュニケーション言語能力）：
 - ・社会言語能力（p. 61）
- 一般的能力（p. 76）

なお、この力は「民主的な文化への能力（Competences for Democratic Culture）」とも大きく関連します。

※参考：『『日本語教育の参照枠』の活用のための手引』（p. 8）

ここまでの説明を整理すると、以下の図4のようになります。

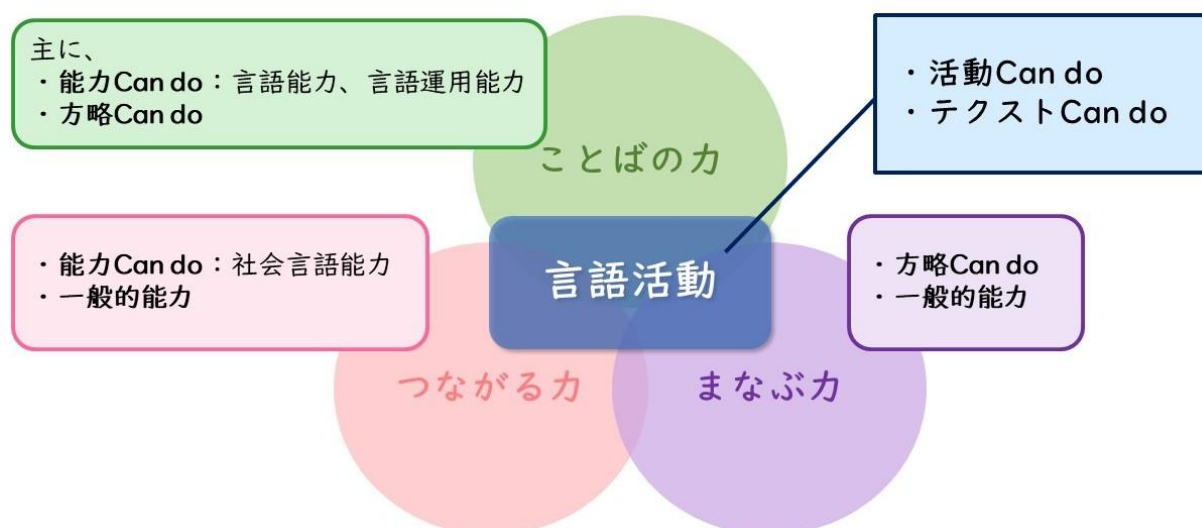


図4 【3つの力】と「日本語教育の参照枠」Can do との関連

忘れてはならないのは、【3つの力】は一つ一つ個別に育成されるのではなく、全ての要素が相互補完的に関与し合いながら育まれるという点です。また、学習者一人一人が遂行したいと願う「言語活動」が達成できるかどうか、および、その達成度は、【3つの力】の状態によって大きく左右されると考えられます。つまり、【3つの力】と「言語活動」は全てが有機的につながりながら育成されるということです。

3. 留学分野の日本語教育のためのカリキュラム

3.1 留学分野の日本語教育カリキュラムを作成するための4つのポイント

留学分野の日本語教育機関においてカリキュラムを検討・作成する上で大切にすべき視点とはどのようなものでしょうか。私たちは、次の4点全てが満たされることが望ましいと考えました。

- (1) 留学分野の日本語教育の「学習・教育の目標」：【3つの力】の育成を目指すこと。
- (2) 一人一人の学習者が日本語を用いて遂行したいと願う言語活動に対応できること。
- (3) 一人一人の学習者に適した学びの道筋や速度に対応できること。
- (4) 教育機関の特性や状況に応じて、柔軟にカリキュラムを構築・再構築できること。

(1)は、留学分野の日本語教育機関では、日本語力の育成に加え、前述の【3つの力】を包括的かつ複合的に育成することのできるカリキュラムの作成が望まれるということです。

(2)(3)の、「一人一人の学習者」に着目し対応することの重要性については、「日本語教育の参照枠」の「言語教育観の柱」の一つとして次のように記されています。

Ⅰ 日本語学習者を社会的存在として捉える

学習者は、単に「言語を学ぶ者」ではなく、「新たに学んだ言語を用いて社会に参加し、より良い人生を歩もうとする社会的存在」である。言語の習得は、それ自体が目的ではなく、より深く社会に参加し、より多くの場面で自分らしさを発揮できるようになるための手段である。

(「日本語教育の参照枠」p. 6)

留学分野の日本語教育機関には多様な学習者が在籍していますが、その一人一人がそれぞれの目的・希望・夢を持った「社会的存在」です。この考え方を基盤とし、全ての学習者に柔軟に対応できるようなカリキュラムを検討・作成することが求められるでしょう。学習者を「日本語学習者」と一括りで捉えるのではなく、「一人の社会的存在」と捉える視点がカリキュラムにも反映されることが望ましいと考えます。

(4)は、日本語教育機関にもそれぞれの特性や個性がありますから、その特色が最大限に発揮されるようなカリキュラムが各機関で開発されることを願うものです。

こうした視点からカリキュラムの検討・作成を行うことを通して、自分たちは何を目指した教育を行うのか(1)、在籍する学習者一人一人の目標や個性(2, 3)、そして、教育機関の特色(4)をしっかりと見極めたり、改めて見直す好機ともなるでしょう。

3.2 カリキュラム作成のための2つのツール

そこで、上述の4点を念頭に、各機関が「日本語教育の参照枠」を参照しながら³独自のカリキュラムを柔軟に検討・作成できるよう、以下の2つのツールを開発しました。

- ・コースフレームワーク
- ・モジュールボックス

この「コースフレームワーク」と「モジュールボックス」を組み合わせることで、各機関に適したカリキュラムを作成することができます。3.1で示した「留学分野の日本語教育カリキュラムを作成するための4つのポイント」のうち、(1)(2)には「モジュールボックス」が、(3)(4)には「コースフレームワーク」がご活用いただけたと考えます。

以下に、それぞれがどのようなツールであるかを概説しますが、それぞれをどのような手順で、どのように組み合わせていくか、その具体的な作成手順と作成方法については、別添の「カリキュラムの作り方の例」をご参照ください。

3.2.1 コースフレームワーク

「コースフレームワーク」とは、留学分野の日本語教育機関に設置される最長2年間の学習課程（コース）を横長の帯の形で示した枠（フレームワーク）のことです。教育機関ごとに、コースフレームワークに学習期間、学期、学習段階（レベル）を当てはめると、機関独自の学習課程の枠組みを示すことができます。

コースフレームワーク：留学分野の日本語教育機関の学習課程（最長2年間）

--

この帯に学期の区切りを設けると、例えば、以下の例1・例2のようになります。例1は、2年間で1学期6か月として4学期に区切ったもので、例2は、1.5年間で1学期3か月として6学期に区切ったものです。

例1：2年間・4学期（1学期＝6か月）の場合

--	--	--	--

例2：1.5年間・6学期（1学期＝3か月）の場合

--	--	--	--	--	--

³ 「認定日本語教育機関 日本語教育課程編成のための指針（案） 留学のための課程」（前掲；注2参照）の「2 考え方」（p.1）では、「認定日本語教育機関は、[中略]「日本語教育の参照枠」並びに別表「言語活動ごとの目標」を参照しながら、目的及び到達目標、学習目標に対応した教育内容を適切かつ体系的に定め、目標とする日本語能力が習得できるよう授業を設計、実施する」と示されている。

この例1、例2の学期の区切りにレベルを当てはめると、次のように機関独自の学習課程の枠組みを示すことができます。

以下の例1は、A2から始めて2年間でB2を目指す例です。2年目にB2が2学期間にわたって設定されており、B2の安定的な力を獲得するには約1年かかると想定されたカリキュラムであることを示しています。

例1：2年間・4学期（1学期＝6か月）の場合

〈進学コース2年：1学期6か月×2学期/年×2年の例〉

1年目前期・A2	1年目後期・B1	2年目前期・B2	2年目後期・B2
----------	----------	----------	----------

以下の例2は、A1から始めて1.5年間でB2を目指す例です。B1が3学期間にわたって設定されており、B1の安定的な力を獲得するには9か月かかると想定されたカリキュラムであることを示しています。

例2：1.5年間・6学期（1学期＝3か月）の場合

〈一般コース1.5年：1学期3か月×4学期/年×1.5年の例〉

1学期・A1	2学期・A2	3学期・B1	4学期・B1	5学期・B1	6学期・B2
--------	--------	--------	--------	--------	--------

● 留意点

ここで示すものは、あくまでも例です。

- ・学期や学習時間は、教育機関ごとに設定してください⁴。
 - ・各レベルに要する学習時間は、在籍する学習者の状況等により設定してください⁵。
- ※ただし、認定日本語教育機関では「必須の設定レベル⁶」とされている「B2レベル」に到達できるコースを最低一つは設置する必要があります。

教育機関ごとに対象とする学習者の層は異なりますし、一人一人の学習者の学びのペースもさまざまですから、学習効果・教育効果等も鑑みながら柔軟にカリキュラムを検討・作成することが望まれます。この点を踏まえ、以下に「コースフレームワーク」のモデルとして、①原型モデル、②Aレベル中心モデル、③Bレベル中心モデルの3つを例示します。このうち、「②Aレベル中心モデル」は、最長2年間の学習期間内に認定基準であるB2レベルに到達しないモデルですので、B2レベルを目指すコースとの併存を図るなど、工夫が必要となります。

⁴ ただし、学習時間は「原則、1年にわたり760単位時間以上」という認定基準上の授業時数に則って設定する必要があります。「認定日本語教育機関 日本語教育課程編成のための指針（案） 留学のための課程」（前掲；注2参照）の「5-2 留学分野；（3）修業期間・学習時間」（p.9）を参照。

⁵ 各レベルに要する学習時間については、「認定日本語教育機関 日本語教育課程編成のための指針（案） 留学のための課程」（前掲；注2参照）の「別表」（p.17）に目安が示されている。

⁶ 「認定日本語教育機関 日本語教育課程編成のための指針（案） 留学のための課程」（前掲；注2参照）の「別表」（p.18）を参照。

①原型モデル

「原型モデル」は、A1～C1までの各レベルがほぼ一定の学習時間で進められていくモデルです。

1学期3か月で10の学習段階を設定しています。10段階全てを学習すると2年半かかりますから、在留資格「留学」の期限内では修了できませんが、学習者の在留資格によっては10段階全てを履修する学習者もいるかもしれません。あるいは、途中の学習段階から学習を始めた、途中の学習段階で学習を終える学習者もいるかもしれません。

留学分野の日本語教育機関のコースとしては、概ね、このうち8段階を2年分として設定することになると思われますが、複数のコースが設置可能な教育機関であれば、この10段階を全て設定することも可能でしょう。

時間	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月
学習段階	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
参照枠レベル	～A1	A1～A2	A2	A2～B1	B1	B1	B1～B2	B2	B2	C1～

②Aレベル中心モデル

「Aレベル中心モデル」は、基礎のレベル（Aレベル）に十分な時間をかけ、B1到達を目指すモデルです。

*想定される対象：非漢字圏の学習者、学習に時間のかかるタイプの学習者、生活者、就労者、学び直しの学習者、趣味や関心から学ぶ学習者 等

時間	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月
学習段階	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
参照枠レベル	～A1	A1	A2	A2	A2	A2～B1	B1	B1

● Aレベル中心モデルの例

例1 一般コース1.5年間：1学期3か月×4学期/年×1.5年の場合

1学期・A1	2学期・A1	3学期・A2	4学期・A2	5学期・A2	6学期・B1
--------	--------	--------	--------	--------	--------

例2 一般コース1年間：1学期3か月×4学期/年×1年の場合

（対象：文化体験目的、趣味や関心から日本語を学ぶ学習者 等）

1学期・A2	2学期・A2	3学期・A2	4学期・A2～B1
--------	--------	--------	-----------

例3 一般コース1年間：1学期3か月×4学期/年×1年の場合

（対象：学習に困難を抱える学習者 等）

1学期・A1	2学期・A1	3学期・A2	4学期・A2
--------	--------	--------	--------

③B レベル中心モデル

「B レベル中心モデル」は、B レベルに十分な時間をかけ、CⅠ 到達も目標とし得るモデルです。アカデミック・ジャパニーズやビジネス・ジャパニーズなどにも時間が充てられそうな余裕のあるコースモデルです。

＊想定される対象：母国で学習歴のある学習者、学習レディネスが身についた学習者、進学や就職などを目的とした学習スピードの速い学習者 等

時間	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月
学習段階	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
参照枠レベル	BⅠ	BⅠ	BⅠ～B2	B2	B2	B2	B2～CⅠ	CⅠ

● B レベル中心モデルの例

例 1 進学コース 2 年間：1 学期 6 か月×2 学期/年×2 年の場合

＊A2 後半レベルから学習を始めるケース

1 学期・A2～BⅠ	2 学期・BⅠ	3 学期・BⅠ～B2	4 学期・B2～CⅠ
------------	---------	------------	------------

例 2 進学コース 2 年間：1 学期 6 か月×2 学期/年×2 年の場合

＊BⅠ レベルから学習を始めるケース

1 学期・BⅠ	2 学期・BⅠ～B2	3 学期・B2	4 学期・B2～CⅠ
---------	------------	---------	------------

さて、ここまで示した 3 つのモデルを一つずつ設置できれば理想的ですが、教育機関の規模等によりコースを一つしか設置できない場合もあるでしょう。そのような場合は、一つのコースで進路や進度の異なりに対応できるように学習者にいくつかの選択肢が提供できることが望ましいでしょう。そこで、以下に 2 つのバリエーションを例示します。

○バリエーションⅠ：分岐型モデル

1 学期 3 か月で 2 年間のコースの例です。①②の学習段階では全ての学習者が同じレベルの学習を行い、③以降の学習段階ではレベルや進度によってクラスを分け、それぞれに学習を行うという例です。上記の A レベルに十分な時間をかける「A レベル中心モデル」の一部と「B レベル中心モデル」を同時並行させる形となっています。

時間	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月	3 か月
学習段階	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
参照枠レベル	AⅠ	A2	A2	A2	BⅠ	BⅠ	BⅠ	B2
			BⅠ	BⅠ	BⅠ	B2	B2	B2

〈留意点〉

この「分岐型モデル」では、②の学習段階修了時に能力判定を行うこととなりますので、学習者にはあらかじめそのことを伝え、進捗やカリキュラムの説明を十分に行う必要があります。

○バリエーション2：選択型モデル

1学期3か月で2年間のコースの例です。1年目（①～④の学習段階）は、2年目からの選択に向け、全ての学習者が同じ内容で基礎固めの学習を行います。2年目（⑤の学習段階）以降は、選択科目によって学習者自らが自分に合ったレベルの科目を選択できるという例です。⑤⑥の学習段階では必修科目と選択科目が半分ずつですが、⑦⑧の学習段階では全て選択制となっています。

選択科目は、学習者のレベルや進路に応じて設けるのがよいでしょう（例、大学／大学院進学希望者向けのアカデミック・ジャパニーズ等の科目、就職希望者向けのビジネス・ジャパニーズ等の科目など）。また、各機関の特色を生かした選択科目の提供も可能となります。

時間	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月	3か月
学習段階	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
参照枠レベル	A1	A2	A2	B1	BI 必修	BI 必修	B2 選択	B2 選択
					BI 選択	BI 選択	BI 選択	BI 選択

〈留意点〉

この「選択型モデル」では、学習者が自分の学習目的や能力に適したレベルや科目が選べるよう、あらかじめ十分なオリエンテーションや個別のアドバイジングが重要となります。

以上、「コースフレームワーク」について、さまざまなモデルと共に説明してきました。これから新たにコースを設置する際、あるいは、これまでのコースを見直す際の参考としていただき、機関の特色を生かした独自のコースが設定されることを願います。

3.2.2 モジュールボックス

「モジュールボックス」とは、「日本語教育の参照枠」に示されている各種 Can do を、留学分野の日本語教育機関に在籍する学習者が行うであろう言語活動イメージから大きなモジュール（大項目）ごとに整理したものです。具体的なツールは以下をクリックしてご覧ください。

[〈モジュールボックス \(Version 1.1\) 2025.03.31〉](#)

この「モジュールボックス」には「日本語教育の参照枠」の「活動 Can do」「テキスト Can do」「方略 Can do」「能力 Can do」の全ての要素が反映されています⁷。これは、3.1 で示した「留学分野の日本語教育カリキュラムを作成するための4つのポイント」のうち、「(1) 留学分野の日本語教育の「学習・教育の目標」：【3つの力】の育成を目指すこと」を念頭に置いたものです。

また、「(2) 一人一人の学習者が日本語を用いて遂行したいと願う言語活動に対応できること」を目指し、留学分野の日本語教育機関に在籍する多様な学習者が遂行したいと求める言語活動の具体例を洗い出し、それらを「日本語教育の参照枠」の「活動 Can do」と照合しながら、以下の「留学分野の日本語教育における基本 10 モジュール」として選定しました。いわば「大きな Can do（大項目）」ともいえるものです。

● 留学分野の日本語教育における基本 10 モジュール

1. 授業／講義に参加できる
2. グループでの活動に参加できる
3. 試験の準備・対策ができる
4. 面接・面談が受けられる
5. 情報収集ができる
6. 情報発信ができる
7. 問い合わせができる
8. 社交ができる
9. 手続きができる
10. 楽しむことができる

この 10 モジュールは、留学分野の日本語教育機関には高等教育機関への進学を目指す学習者が比較的多く在籍していることを意識したものではありませんが、同時に、就職や生活等を目的として日本語を学ぶ学習者にも幅広く対応できるよう抽出・選定しています。例えば、「3. 試験の準備・対策ができる」は、日本語の試験や入学試験だけでなく各種資格試験や運転免許試験など、学習者自身が試験に向けて行う対策という目的行動を包括するモジュールです。

⁷ 「日本語教育の参照枠」に示されている Can do については、本報告書の巻末の「参考資料①：『日本語教育の参照枠』各種 Can do 一覧」でご確認いただけます。

● モジュールボックスの構成

「モジュールボックス」は以下のような構成になっています。

(1) 「インデックス (INDEX)」

「留学分野の日本語教育における基本 10 モジュール」を記した目次です。

【留学類型：基本10モジュール】		* 青字部分をクリックすると詳細説明に移動します。	
1	授業／講義に参加できる	6	情報発信ができる
2	グループでの活動に参加できる	7	問い合わせができる
3	試験の準備・対策ができる	8	社交ができる
4	面接・面談が受けられる	9	手続きができる
5	情報収集ができる	10	楽しむことができる

(2) 各モジュールの活動や学習活動に関する情報

- ①「基本モジュール 10」の項目です。
- ②このモジュールの活動が行われると想定される主な領域を○や◎で示しています。
(私的領域・公的領域・職業領域・教育領域の4つの領域⁸⁾)
- ③このモジュールの活動の遂行に大きく関わると考えられる「日本語教育の参照枠」の「コミュニケーション言語活動 (活動 Can do)」の種類を示しています。
(聞く・読む・やり取り・発表・書く・テキストの6つの活動⁹⁾)
- ④このモジュールがどのような活動であるか、その特徴を説明しています。
- ⑤このモジュールの「活動 Can do の例¹⁰⁾」、「具体的な行動の例」、その行動の遂行に向けた「学習活動例」を示しています。

① 1 授業／講義に参加できる		④		⑤	
②		③			
領域		レベル		学習活動例	
私的 公的 職業 教育		B2		授業／講義に参加できる	
コミュニケーション言語活動		B1		授業／講義に参加できる	
理解する 読む 書く		A2		授業／講義に参加できる	
③		A1		授業／講義に参加できる	

(基本 10 モジュール「1 授業／講義に参加できる」の例)

このページを下にスクロールすると、2～10 のモジュールについて、同じように閲覧することができます。

⁸ 4つの領域は、CEFR (2001, pp. 45-46; 吉島・大橋 2014, pp. 46-47) を参考にしました。

⁹ 6つの活動については、本報告書の巻末の「参考資料①：『日本語教育の参照枠』各種 Can do 一覧」をご参照ください。

¹⁰ ここで示しているレベル別の Can do は「日本語教育の参照枠」を参照しながら私たちが任意で記述したものです。「日本語教育の参照枠」を参照し、各機関で自由に作成することが可能です。

赤枠は、「日本語教育の参照枠」の「活動 Can do」「テキスト Can do」「方略 Can do」「能力 Can do」のカテゴリー項目を全て示した一覧です。このモジュールの活動の遂行に大きく関わると考えられる項目を黄色でハイライトして例示しています。

(基本 10 モジュール「1 授業／講義に参加できる」の例)

例. 相互行為活動（やり取り）の方略
「説明を求めること」

・「日本語教育の参照枠」の全体像を把握する機能

前述の通り、「モジュールボックス」には「日本語教育の参照枠」の「活動 Can do」「テキスト Can do」「方略 Can do」「能力 Can do」の全ての要素が反映されており、全ての種類の Can do が一枚のシート上で見渡せるようになっています。また、同シート上から、全ての「言語能力記述文¹⁾」に簡便にアクセスできるよう開発しました。これ

15

により、「日本語教育の参照枠」のしくみが理解しやすくなり、その全貌の理解促進が期待されます。

・各日本語教育機関のカリキュラムを点検・検証する機能

この「モジュールボックス」は、カリキュラムを新たに作成する際、および、既存のカリキュラムを改訂・修正する際にも活用できます。以下は点検・検証の例です。

例1 「日本語教育の参照枠」を参照したカリキュラムかどうか。

例2 言語を使ってできること（Can do）を基盤としたカリキュラムかどうか。

例3 学習活動の種類、幅、バランスが適切かどうか。

例4 学習活動の偏りは自機関の特色や学習者の目的に適したものかどうか。

以上、「モジュールボックス」について説明してきましたが、前述の「コースフレームワーク」と共に参考としていただき、機関の特色を生かした独自のカリキュラムが作成されることを願います。

4. カリキュラム作成のための教師研修

「日本語教育の参照枠」を参照した教育を実践するためには、「日本語教育の参照枠」の理解およびこれを活用したカリキュラム作成のための教師研修が欠かせません。そこで、2024年1月13日に実施した下記の試行研修の「6. ワークショップ」の内容と手順をカリキュラム作成のための教師研修モデルとして提案します。

● 試行研修の概要

研修名：令和5年度文化庁委託「『日本語教育の参照枠』を活用した教育モデル開発事業」

カリキュラム作成のための教員研修 試行

実施日：2024年1月13日（土）10:00～17:00

形 式：オンライン

参加条件：・留学分野の日本語教育機関においてカリキュラム作成に携わる校長・主任教員・専任教員

・「日本語教育の参照枠」を基本的に理解していること

・全日参加可能で、アンケート等を通して本事業教育モデルに関して意見がいただけること

参加者：計50名（定員50名）

内 容：1. 開催の挨拶

2. 開催の趣旨

3. 留学分野の教育モデル開発の概要

4. カリキュラム作成とコースフレームワーク

5. モジュールボックスとその活用

6. ワークショップ

7. 評価に関する事例紹介

8. 質疑応答

9. 全体のまとめ

4.1 カリキュラム作成のための教師研修の流れ：試行研修「ワークショップ」より

試行研修のワークショップでは、「コースフレームワーク」と「モジュールボックス」を活用し、ワークシート（参考資料②：カリキュラム作成のためのワークシート）を埋めながら4つの作業が行われました。各作業は個人作業とし、一つの作業を終えるごとに複数名の参加者同士で共有を行いました。

「『日本語教育の参照枠』の活用のための手引」（pp. 19-20）では、カリキュラムデザインのための考え方として「バックワード・デザイン（逆向き設計）」が示されています。これは、まず「学習目標」を設定し、次に「評価方法」を決定した上で、「授業の内容や方法」を検討するという順序で、カリキュラム全体の設計を行うという考え方です。この手順を図示したのが、次頁の図5です。試行研修のワークショップも、この「バックワード・デザイン」の考え方を基に設計されています。

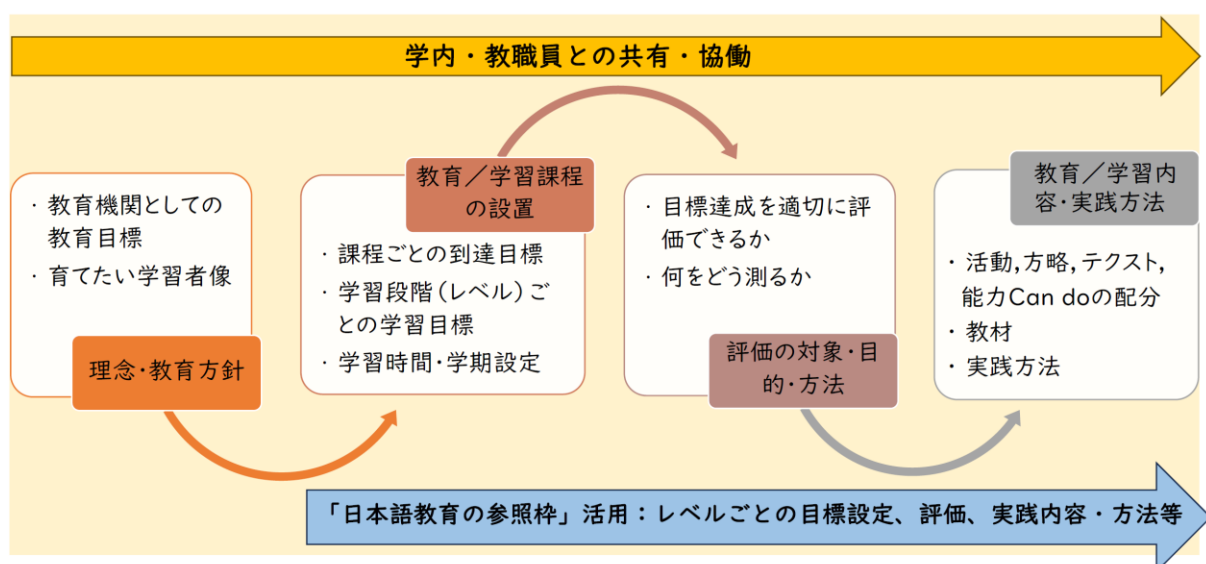


図5 カリキュラム作成の手順

以下が、試行研修のワークショップで行われた4つの作業です。

作業①：「自校の教育理念」と「卒業時の学生のイメージ」の明文化

まず、機関の教育理念と卒業時の学習者のイメージを明文化します。

自校の教育理念	
卒業時の学生のイメージ	

*より具体的な「卒業時の学生のイメージ」については、次章の「5. 多様な学習・教育目標を保障する視点」もご参照ください。

作業②：「コースフレームワーク」の選択と調整

次に、「コースフレームワーク」の「①原型モデル、②Aレベル中心モデル、③Bレベル中心モデル」から機関の実情に合うもの／箇所を選択してコピーし、必要に応じて時間数や参照枠レベル等を調整して作成します。

コースフレームワーク	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
時間										
学習段階										
参照枠レベル										

● 作成例：「原型モデル」の一部をコピーしたのち、調整した例

コースフレームワーク	1年目・前期		1年目・後期		2年目・前期		2年目・後期			
時間	6か月		6か月		6か月		6か月			
学習段階	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		
参照枠レベル	A1～A2	A2	A2～B1	B1	B1	B1～B2	B2	B2		

作業③：「基本 10 モジュール」を参考に、各学期の主たる活動を考える

各学期で行う／行いたい主な活動を考え、「基本 10 モジュール」の欄に色を塗ります。

※濃い色＝重視して行う活動、薄い色＝行う活動、白（余白）＝行わない活動

もし「基本 10 モジュール」以外の活動が必要な場合は、一番下の「*オリジナル」の欄に記入します。

この作業を行う際、「モジュールボックス」を活用すると、各モジュールの活動の特徴、Can do、学習活動例などが確認できます。

10モジュール	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 授業／講義に参加できる										
2 グループでの活動に参加できる										
3 試験対策ができる										
4 面接・面談が受けられる										
5 情報収集ができる										
6 情報発信ができる										
7 問い合わせができる										
8 社交ができる										
9 手続きができる										
10 楽しむことができる										
* オリジナル										

● 作成例

10モジュール	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 授業／講義に参加できる										
2 グループでの活動に参加できる										
3 試験対策ができる										
4 面接・面談が受けられる										
5 情報収集ができる										
6 情報発信ができる										
7 問い合わせができる										
8 社交ができる										
9 手続きができる										
10 楽しむことができる										
* オリジナル										

この作業を通してコース全体の流れを見渡すことができ、以下のようなバックワード・デザインの観点について検討、検証、点検することも可能となります。

- ・各学期で重視される活動が明確となり、学期ごとの目標設定ができる。（目標）
- ・各学期で重視される活動を軸に、学期ごとの評価の項目や方法が検討できる。（評価）
- ・コース全体の活動のバランスが明確となり、その妥当性が検証できる。（活動）
- ・Can do の視点から使用教材の特徴を確認することができる。（教材）
- ・教育内容が教育理念および卒業時の学生イメージと整合しているか点検できる。（理念）

作業④：一つの学期について、その具体的な学習活動を考える

最後に、作業③の情報を基に、各学期で行う具体的な学習活動について考えます。

ワークショップでは、一つの学期（ターム）を自由に選択し、作業③で濃い色（重視して行う活動）、薄い色（行う活動）が付いたモジュールの学習活動について、「コミュニケーション言語活動」の種類、Can do、学習項目等を考えました。

この作業を行う際にも「モジュールボックス」を活用すると、具体的な学習活動を考えるための手掛かりが得られるでしょう。

【第〇ターム】 3か月間の中で行う学習活動

10モジュール番号	学習活動	コミュニケーション言語活動	Can do	学習項目等

● 作成例Ⅰ：一つのモジュールごとに学習活動考えた例

10モジュール	1	2	3	4	5	6	7	8
1 授業ノ講義に参加できる								
2 グループでの活動に参加できる								
3 試験対策ができる								
4 面接・面談が受けられる								
5 情報収集ができる								
6 情報発信ができる								
7 問い合わせができる								
8 社交ができる								
9 手続きができる								
10 楽しむことができる								
* オリジナル								

* 第4タームを選択し、モジュールごとに活動を考えている。

【第4ターム】 3か月間の中で行う学習活動

10モジュール番号	学習活動	コミュニケーション言語活動	Can do	学習項目等
5	進学についての情報取り	読むこと	自分の希望する進学先を調べ、必要な情報を得ることができる。	H P、チラシ、パンフレットの情報取り
7	公共施設訪問	やりとり	施設の利用について職員の説明を聞き取ることができ、分からないことを質問できる。	情報の聞き取り
8	ボランティア活動	やりとり	地域の参加者と地域交流を通して自分の視野を広げることができる。	世代、性別での違いがある話し方を聞いて理解する

● 作成例2：2つのモジュールを組み合わせて学習活動を考えた例

10モジュール	1	2	3	4	5	6	7	8
1 授業/講義に参加できる								
2 グループでの活動に参加できる								
3 試験対策ができる								
4 面接・面談が受けられる								
5 情報収集ができる								
6 情報発信ができる								
7 問い合わせができる								
8 社交ができる								
9 手続きができる								
10 楽しむことができる								
* オリジナル								

*第7タームを選択し、複数のモジュールを組み合わせた活動を考えている。

【第7ターム】 3か月間の中で行う学習活動				
10モジュール番号	学習活動	コミュニケーション言語活動	Can do	学習項目等
2, 4	協働で学習活動を行う。 「私の夢」についてのマインドマップを書いて、それを見せながらペアで話す。	やりとり	・組み立てられたインタビューをやり送るために、あらかじめ用意した質問用紙を使うことができ、相手の答えを受けてそれに続くような質問を幾つかは出すことができる。	・インタビューの流れの確認 ・アサーション（対人コミュニケーション）
7, 8	進学説明会を聞くなど、学校外部の人の日本語に慣れる活動。 発表活動活動の中で質疑応答に慣れる	発表 やりとり 聞く	・インタビューを滑らかに効果的に行うことができる。相手の興味深い返答を取り上げ、用意した質問を自発的に変えるなどして、更に興味深い答えを引き出すことができる。	・口頭発表のための発音練習 ・研究発表の実例（聞き取り練習）
6, 9	企画プレゼンテーション活動を行う	書く発表	・実際、若しくは想像上の出来事や経験について、複数の見解を相互に関連付け、当該のジャンルの書記習慣に従って、明瞭かつ詳細に記述文を書くことができる。 ・事前に用意されたプレゼンテーションをはっきりと行うことができる。ある見方に賛成、反対の理由を挙げて、幾つかの選択肢の利点と不利な点を示すことができる。 ・一連の質問に、ある程度流ちょうに自然に対応ができる。話を聞く、あるいは話をする際に聴衆にも自分にも余分な負担を掛けることはない。	・ブレインストーミングの方法 ・研究発表の実例（口頭発表の練習） ・プレゼンテーションの表現 ・効果的なスライドの作例

以上の手順で一連の作業を行うことで、「日本語教育の参照枠」を参照した機関独自のカリキュラム作成ができると同時に、ボトムアップによる「日本語教育の参照枠」の理解促進にもつながることが期待されます。

4.2 カリキュラム作成のための教師研修を試行した結果：アンケート結果より

上述の研修試行後のアンケート調査の結果の概要を以下に報告します。

● アンケート調査の概要

調査期間：2024 年 1 月 13 日～1 月 16 日

調査対象：研修参加者 50 名

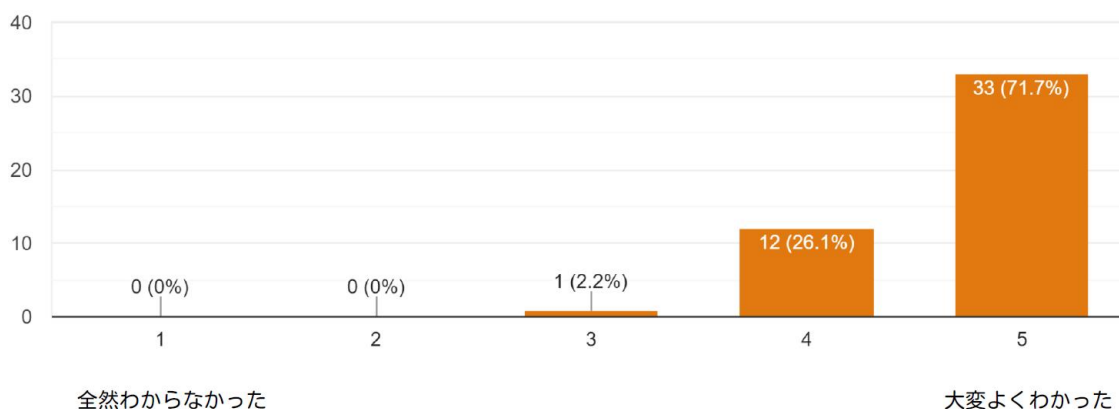
調査方法：オンラインフォームによる質問調査

有効回答数：46

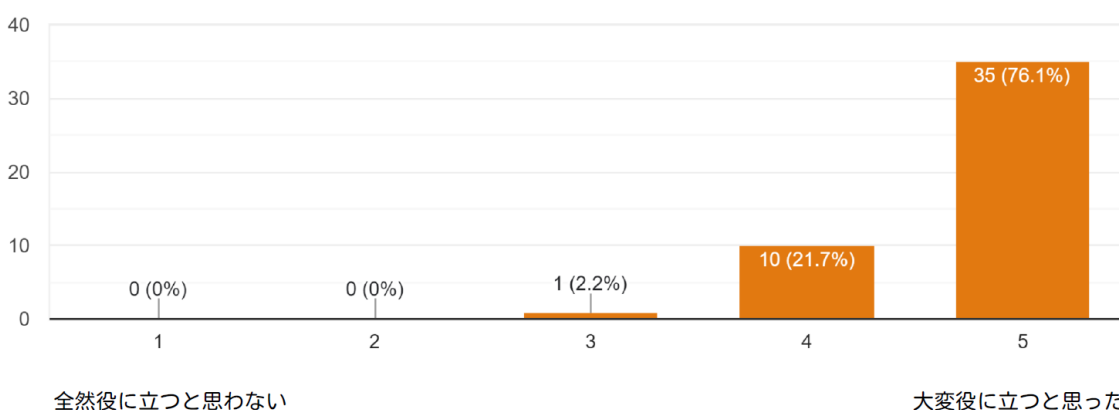
● 質問と回答（*アステリスク付きの質問は必須回答）

Ⅰ. 〈コースフレームワーク〉について

Ⅰ-Ⅰ. 〈コースフレームワーク〉の説明内容はわかりやすかったですか？*



Ⅰ-2. 〈コースフレームワーク〉はカリキュラムを作成する際に役立つと思いませんか？*



Ⅰ-3. 〈コースフレームワーク〉に関するご意見・ご感想を自由にお書きください。

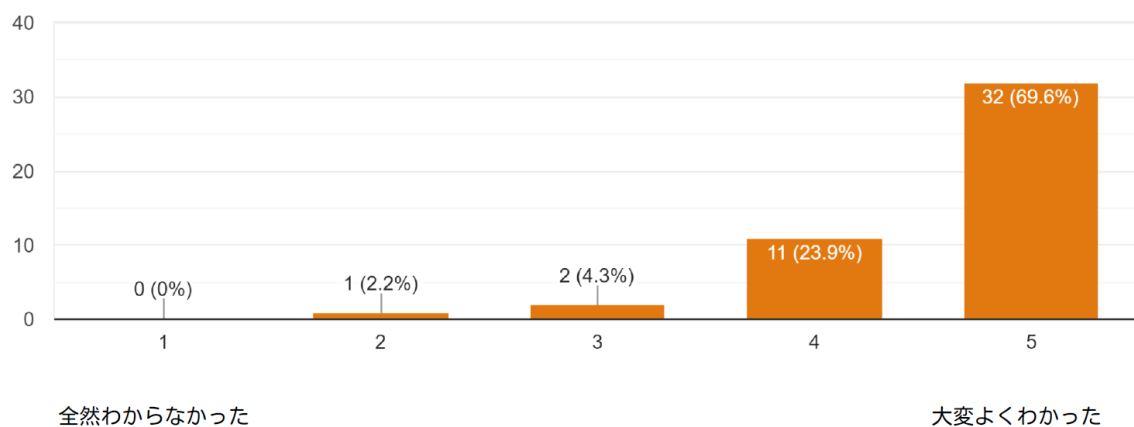
自由記述回答には「分岐型モデル」が参考になるという肯定的な意見が多数見られた。

その他、指摘、提案、要望は以下の通り。

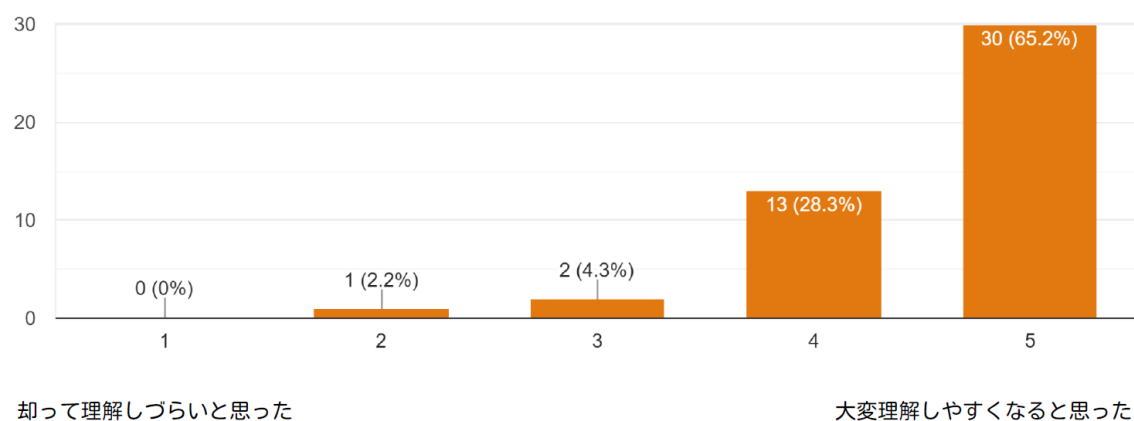
- ・学習時期（進学・卒業をゴールとした年度内の時期）が反映されるとよい。
- ・途中で分岐したあとのクラス編成例があるとよい。
- ・現状に合ったコースフレームワークの作成、普及、そしてそれが認可にちゃんとつながっていくという流れができるとうい。

2. 〈モジュールボックス〉について

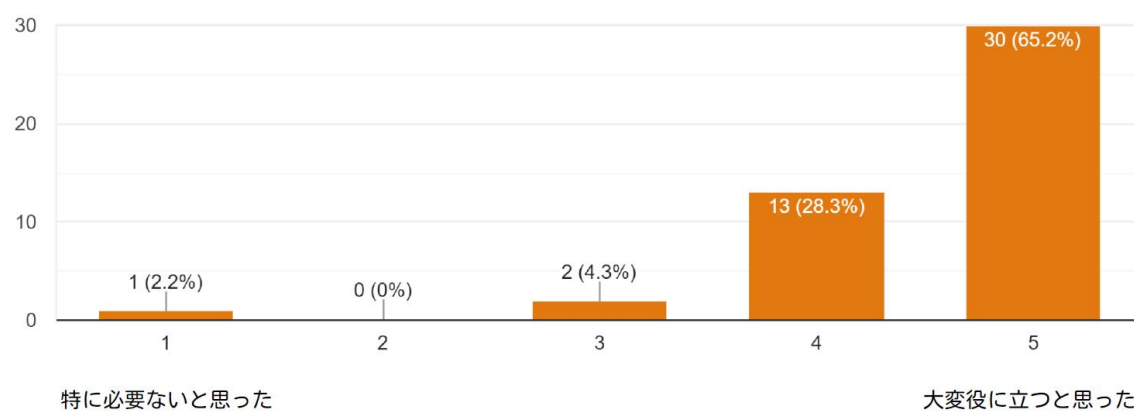
2-1. 〈モジュールボックス〉の説明内容はわかりやすかったですか？*



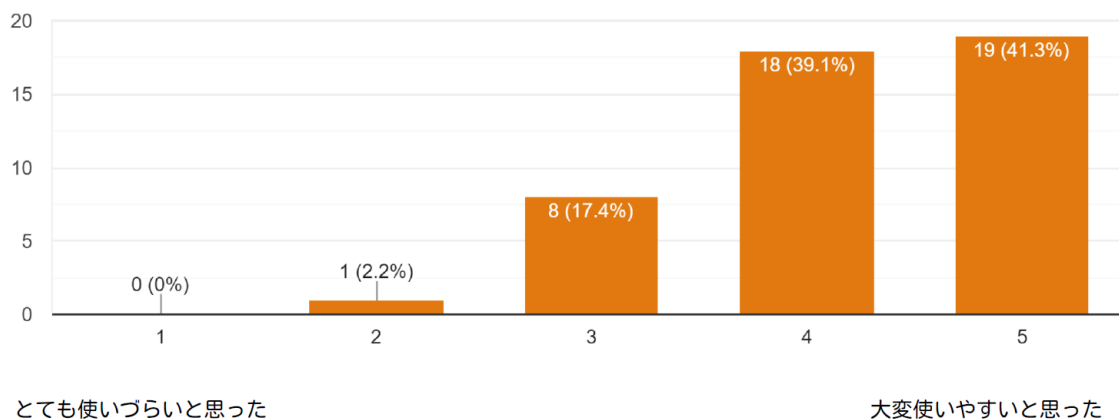
2-2. 〈モジュールボックス〉があることで、「日本語教育の参照枠」の枠組みが理解しやすくなったと思いましたか？*



2-3. 〈モジュールボックス〉は「日本語教育の参照枠」を活用したカリキュラムの作成に役立つと思いましたか？*



2-4-1. 〈モジュールボックス〉は、使いやすいと思えましたか？*



2-4.2. 〈モジュールボックス〉の使いやすさや見やすさ等について、ご意見・ご感想を自由にお書きください。

自由記述回答には「飛べる／ジャンプできる」「手間が省ける」「活動例がある」「基本 10 モジュール」等に対する肯定的な意見が多数見られた。その他、指摘、提案、要望は、以下の 3 点にまとめられる。

- ・右スクロールに対する指摘：一画面で全体が見渡せない、INDEX に全体像がほしい
- ・PC が苦手な人に対する対応：アナログ版（冊子）がほしい
- ・複雑さに対する指摘：もっとシンプルにしてほしい

2-5. その他、〈モジュールボックス〉に関するご意見・ご感想を自由にお書きください。

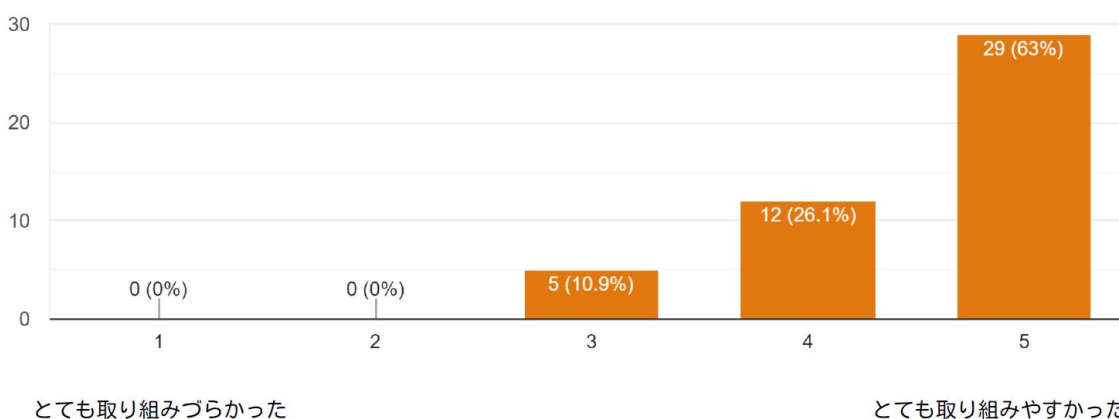
自由記述回答には肯定的な感想が多数見られた。

その他、指摘、提案、要望は以下の通り。

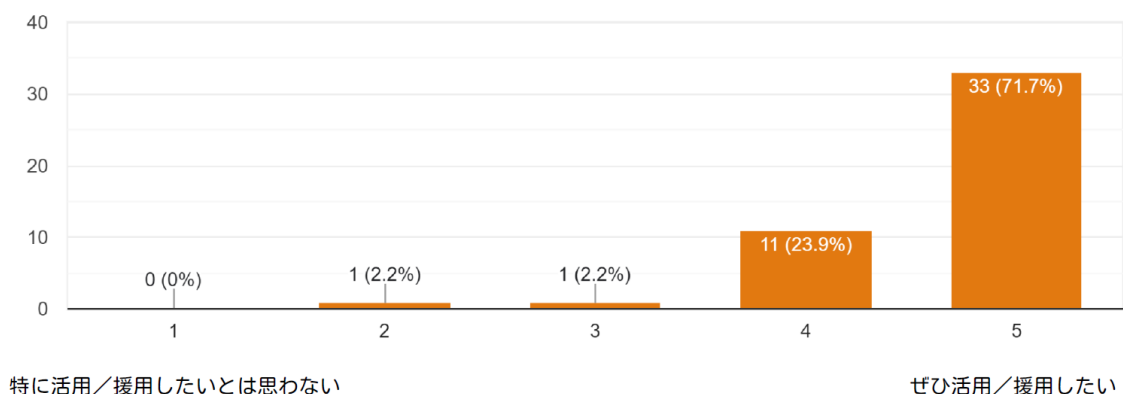
- ・より多岐にわたる広範囲なモジュールがほしい。
- ・毎日の Can do とその内容が書き込めるフォーマットがあるとよい。
- ・モジュールボックスの解説書があるとよい。
- ・1～10 のモジュールは相互に関連している側面が強いため選択が難しい場合がある。

3. カリキュラムの作成について

3-1. カリキュラムを作成する手順はいかがでしたか？*



3-2. ご自身の機関でカリキュラム作成・改訂・再検討を行う際に、〈コースフレームワーク〉と〈モジュールボックス〉を活用／援用してみたいと思いませんか？



3-3. ワークショップで行ったカリキュラム作成に関するご意見・ご感想を自由にお書きください。

自由記述回答には「自校の課題に気づいた」等、自校の振り返りに関する感想が多数見られた。

その他、指摘・提案・要望は以下の通り。

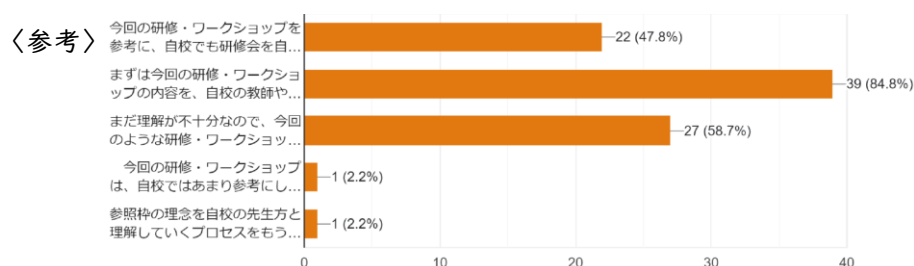
- ・ワークシートの中に、評価を考える部分も追加されるとよい。
- ・教育機関の認定を取得する際に提出する書類の内容につながりがあるとよい。

4. 研修のワークショップについて

4-1. ご自身の機関で「日本語教育の参照枠」を活用した教育やカリキュラムを検討するにあたり、今回の研修・ワークショップは参考になりましたか？（複数回答可）*

- ☐ 今回の研修・ワークショップを参考に自校でも研修会を自主開催してみたい：22 件
- ☐ まずは今回の研修・ワークショップの内容を自校の教師や関係者と共有したい：39 件
- ☐ まだ理解が不十分なので、今回のような研修・ワークショップがあれば今後も参加し、まずは自身の理解を深めたい：27 件
- ☐ 今回の研修・ワークショップは自校ではあまり参考にしないと思う：1 件
- ☐ その他（自由記述）：1 件

参照枠の理念を自校の先生方と理解していくプロセスをもう少し重ねていくと4月にツールが公開されたときにうまく活用できるのではないかと感じた。



4-2. 「日本語教育の参照枠」を活用した教育やカリキュラムを検討するにあたり、「こんな研修やワークショップがあったら参加したい／役立つ」というものがあれば、具体的にお書きください。

自由記述回答の要望・提案は、以下の5点にまとめられる。

- ・意見交換会や実践交流会など、情報共有や交流ができる研修。
- ・「日本語教育の参照枠」に関する研修。
- ・今回と同様の研修、または、経験の浅い教師でも参加できる今回と同様の研修。
- ・新たなカリキュラムをどのように授業に落とし込むかの研修。
- ・評価についての研修。

4-3. その他、今回の研修・ワークショップに参加なさってお感じになったことやご意見等、自由にお書きください。

自由記述回答の感想、意見は、以下の3点にまとめられる。

- ・他校の方との交流で得られた気づきが大きかった。
- ・文科省からの認定を考えると、どこまで自由度が認められるのか不安。
- ・謝辞。

以上が、研修試行後のアンケート調査の結果です。「コースフレームワーク」と「モジュールボックス」という2つのツールおよびカリキュラム作成のための研修・ワークショップに対する評価は概ね肯定的なもので、2つのツールの有用性および研修の有効性がある程度実証されたといえます。一方、数々の改善点も見られ、今後さらに改良を重ねていく必要があります。そのためにも、教育機関の垣根を越えて多くの関係者が集い、共に話し合い、意見を共有する機会を増やしていくことが重要であると考えます。今回のアンケート調査の自由記述回答には、他校の関係者との情報共有の意義について記したものが非常に多く見られました。「日本語教育の参照枠」をきっかけに、今後、そうした機会が増加していくことを期待します。

5. 多様な学習目標・教育目標を保障する視点：「言語活動プロファイル」

教育カリキュラムを作成する際、まずはじめに押さえておくべきは教育理念と教育方針です。すなわち、教育機関として「何を目指して教育を行うのか」「どのような学習者を育てたいのか」を検討し、それを関係者全員で共有することが重要です。このことは前掲のバックワード・デザインの図（図5）にも示されており、それゆえに試行研修のワークショップでもカリキュラム作成の冒頭で「作業①」として取り入れています。

では、留学分野の日本語教育機関の学習者は、修了時に日本語を用いて何がどのくらいできる／できることが求められるのでしょうか。その人物像をできるだけ細かく具体的に描くことによって、日本語教育において求められる言語活動の種類やその到達レベルがイメージしやすくなり、カリキュラムの検討や作成にも役立つと考えます。また、学習者も自分が願う言語活動を遂行するために、どのような種類の言語活動をどのくらいのレベルまで達成する必要があるのか、あらかじめ具体的な目標を立てることで、自身の学びを自己管理しながら学習を進めるのに役立つでしょう。これは、留学分野の日本語教育における「学習・教育の目標」として示した【3つの力】のうちの「まなぶ力」の育成に資するものと思われます。そこで、留学分野の日本語教育機関に在籍する学習者の「言語活動プロファイル」の作成を試みました。これは、CEFR 補遺版（Council of Europe, 2020, p. 38, 39）に示されている2つの図から着想を得たものです¹²。

ここで示す「言語活動プロファイル」はあくまで一例に過ぎません。これらを参考に、各機関に在籍する学習者をつぶさに観察しながら各々のプロファイルが描かれることを願います。

〈「言語活動プロファイル」の例〉

ここで示す「言語活動プロファイル」は、言語能力記述文を一つ一つ参照しつつ、「言語活動カテゴリー」と「レベル」の2つの観点から、次の3種類の学習者をイメージして作成したものです。

- ・進学：大学進学を目的とする人。
- ・就職：技術・人文知識・国際業務の在留資格での就職を目的とする人。
- ・一般：日本文化に興味関心がある人や生活のために日本語を学んでいる人。

なお、この「言語活動プロファイル」の中には、進学や就職を目指す学習者であっても、留学分野の日本語教育の認定基準である B2 レベルに到達していない活動もありますが、これは個々の活動の到達レベルには差が生じるという現実を反映させたもので、包括的な到達レベルを損ねるものではありません。

¹² CEFR 補遺版（Council of Europe, 2020）では、「B2 とか、受容は B2 で産出は B1 といった単純なレベル回答には複雑なプロファイルが隠されている」（p.38, 筆者ら邦訳）と記し、人間の言語能力はさまざまなレベルの多様な要素で構成されているため、単に一つのレベルで表せるものではないことを強調しています。

● 理解すること

・ 聞くこと（受容活動）

	進学	就職	一般
包括的な理解	B2	B2	B1～B2
他の話者同士の対話の理解	B1	B2	B1
聴衆の一人として生で聞くこと	B2	B2	B1
広報・アナウンスや指示を聞くこと	B1	B2	B1
音声メディアや録音を聞くこと	B2	B2	B1
テレビや映画を見ること	none ¹³	none	B1～B2



・ 読むこと（受容活動）

	進学	就職	一般
包括的な読解	B2	B2	B1～B2
通信文を読むこと	B1	B2	B1
世情を把握するために読むこと	B2	B2	B1～B2
情報や議論を読むこと	B2	B2	B1～B2
説明書を読むこと	B1	B2	B1



¹³ 全ての対象者にとって不要な活動（none）であることを意味するものではありません。他も同様。

● 話すこと

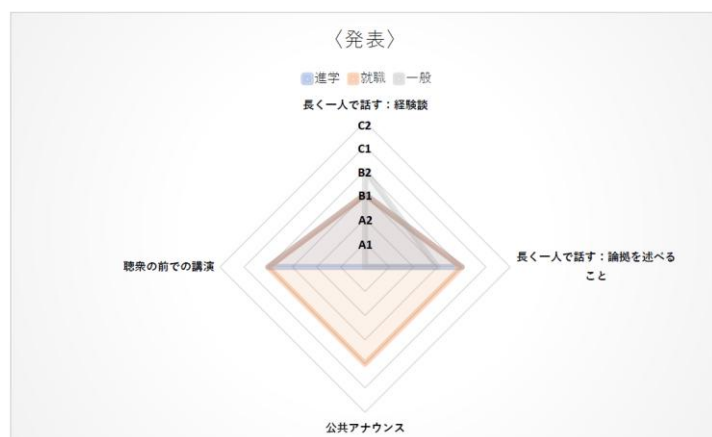
・やり取り（相互行為活動）

	進学	就職	一般
一般的な話し言葉のやり取り	B2	B2	B1～B2
対話相手の理解	B1	B2	B1～B2
会話	B1	B2	B2
非公式の議論	B1	B1	B2
公式の議論のミーティング	B2	B2	none
目的達成のための協同作業	B1	B2	B1
製品やサービスを得るための取引	none	B2	B1
情報の交換	B2	B2	B1
インタビューすること／を受けること	B1	B2	B1



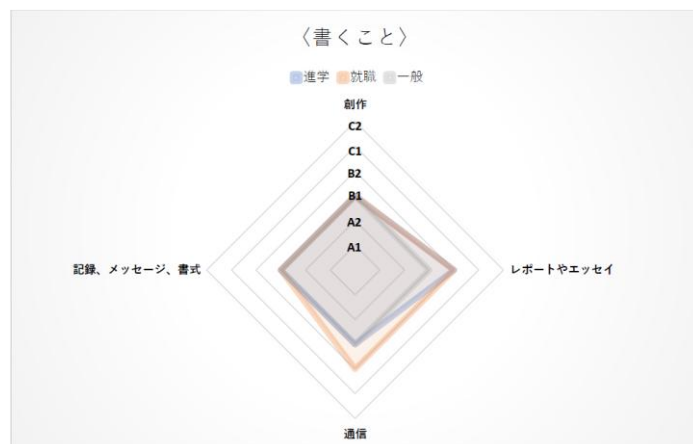
・発表（産出活動）

	進学	就職	一般
総合的な口頭発話	B2	B2	B1～B2
長く一人で話す：経験談	B1	B1	B2
長く一人で話す：論拠を述べること	B2	B2	B1
公共アナウンス	none	B2	none
聴衆の前での講演	B2	B2	none



● 書くこと（産出活動、相互行為活動）

	進学	就職	一般
総合的な書く活動	B2	B2	B1
創作	B1	B1	B1
レポートやエッセイ	B2	B2	B1
一般的な書かれた言葉でのやりとり（相互行為活動）	B1	B2	B1
通信（相互行為活動）	B1	B2	B1
記録、メッセージ、書式（相互行為活動）	B1	B1	B1



● テキスト

	進学	就職	一般
ノート取り（講義やセミナーなど）	B2	B2	none
テキストの処理	B2	B2	B1



「言語活動プロファイル」の作成は、「社会的存在」である一人一人の学習者をこれまで以上に観察する好機となるでしょう。個々の学習者にとって必要な言語活動の遂行に向けた目標設定を行うことで、「できること」に着目した学習活動や評価を検討することができます。目の前の「社会的存在」と真摯に向き合うことを通して、自分たちの教育は自分たちで考え、最適解は自分たちで探るといった当事者としての姿勢、態度、覚悟が、私たちには求められているといえるでしょう。

6. おわりに：成果と今後の課題

私たちは、「日本語教育の参照枠」を活用した留学分野のカリキュラム作成を支援するツールとして「コースフレームワーク」と「モジュールボックス」という2つのツールを開発・作成し、これらのツールを活用しながら行う教師研修モデルを示しました。「コースフレームワーク」は、「モジュールボックス」の素材を配置するための2年間の枠組みで、各教育機関の特性や学習者の背景に応じてカスタマイズできるよう開発・作成し、いくつかの例も示しました。「モジュールボックス」は、留学分野の学習者に求められる目的行動を「基本10モジュール」として選定し、「日本語教育の参照枠」に示されている各種 Can do と関連させながら整理したツールです。言語活動の遂行を目指したカリキュラムやシラバスを作成する際に活用していただけます。留学分野の日本語教育機関には多様な学習者が在籍することを鑑み、進学や就職を目的とする学習者はもとより、それ以外の目的で日本語を学ぶ学習者にも対応可能なモジュールを選定しています。

留学分野の日本語教育機関における「ことばの力」「まなぶ力」「つながる力」の育成という学習・教育目標を基盤に2つのツールを開発できたこと、そして、これらのツールを活用した教師研修モデルの試行ができたことは、大きな成果であろうと思われます。その成果は4.2で示したアンケート結果からもうかがえ、研修参加者の回答は2つのツールの有用性と教師研修モデルの有効性を一定程度実証する結果を示しています。

しかし一方で、多くの課題もあります。以下に、3つに整理して示します。

課題1：2つのツールの内容の精査および機能性・柔軟性・使いやすさをより高めるための改善が必要である。具体的には、以下2点が挙げられる。

- ・「コースフレームワーク」の有用性・機能性を検証するために、より多くの関係者に意見を求め、対応する必要がある。
- ・「モジュールボックス」の中長期的な管理方法および大人数による同時アクセスを可能とする耐久性を検討する必要がある。

課題2：2つのツールおよびその使い方をより広く正確に周知する方法を検討する必要がある。また、広範囲への公開に伴い、意図しない利用方法なども懸念されるため、ツールの使用ガイドラインの明確化等の対応策を講じる必要がある。

課題3：教師研修モデルとして2024年1月に試行した研修の内容・方法を再検討する必要がある。具体的には、以下3点が挙げられる。

- ・研修の内容と方法の妥当性・有効性を検証するために、より多くの多様な教育機関と関係者を対象に研修を試行し、客観的に分析・検討する必要がある。
- ・「日本語教育の参照枠」を活用した実践に対する理解度等のレディネスにより、研修成果や実践への反映／応用に差が生じ得るため、研修対象者や研修テーマを焦点化した研修の在り方を検討する必要がある。
- ・各教育機関あるいは各地域において自主的に研修が実施できるよう、よりわかりやすい教師研修モデルを再検討する必要がある。

私たちは、一人一人が社会的存在である多様な学習者に豊かで柔軟な日本語教育を提供できるよう、教育機関や教育関係者を支援し続けていくことが最大の課題であると捉

えています。この課題解決のためにも、今後、2つのツールの改善と教師研修モデルの再検討という上述の課題に対処し、それを通じて「日本語教育の参照枠」の認知度や理解度の向上がいつそう図られ、留学分野の日本語教育関係者の内省や意識変容に働きかけていけることを願います。

参考資料

参考資料①：「日本語教育の参照枠」各種 Can do 一覧

参考資料②：カリキュラム作成のためのワークシート

参考資料③：参考文献

参考資料④：委員一覧

参考資料①：「日本語教育の参照枠」各種 Can do 一覧

●活動 Can do（コミュニケーション言語活動）、テキスト Can do

理解すること				書くこと	
聞くこと（受容活動）		読むこと（受容活動）		書くこと（産出活動・相互行為活動）	
＊	【包括的な理解】	＊	【包括的な読解】	＊	【総合的な書く活動】
1	【他の話者同士の対話の理解】	1	【通信文を読むこと】	1	【創作】
2	【聴衆の一人として生で聞くこと】	2	【世情を把握するために読むこと】	2	【レポートやエッセイ】
3	【広報・アナウンスや指示を聞くこと】	3	【情報や議論を読むこと】	＊	【一般的な書かれた言葉でのやりとり】
4	【音声メディアや録音を聞くこと】	4	【説明書を読むこと】	1	【通信】
5	【テレビや映画を見ること】			2	【記録、メッセージ、書式】

話すこと			
やり取り（相互行為活動）		発表（産出活動）	
＊	【一般的な話し言葉のやり取り】	＊	【総合的な口頭発話】
1	【対話相手の理解】	1	【長く一人で話す：経験談】
2	【会話】	2	【長く一人で話す：論拠を述べること】
3	【非公式の議論（友人との）】	3	【公共アナウンス】
4	【公式の議論とミーティング】	4	【聴衆の前での講演】
5	【目的達成のための協同作業】		
6	【製品やサービスを得るための取引】		
7	【情報の交換】		
8	【インタビューをすること/を受けること】		

テキスト Can do	
ノート取り（講義やセミナーなど）	
テキストの処理	

（「日本語教育の参照枠」 pp. 24-48, p. 54 を基に作成。通し番号は作成者による）

●方略 Can do（コミュニケーション言語方略）

(1) 産出活動の方略	1	計画
	2	補償
	3	モニタリングと修正
(2) 受容活動の方略	4	手掛かりの発見と推論（話し言葉と書き言葉）
(3) 相互行為活動の方略	5	発言権の取得／保持
	6	協力
	7	説明を求めること

（「日本語教育の参照枠」 pp. 49-53 を基に作成。通し番号は作成者による）

●能力 Can do（コミュニケーション言語能力）

(1) 言語能力	
	＊ 言語構造的能力／使える言語の範囲
①語彙能力	1 語彙使用領域
	2 語彙の使いこなし
②文法能力	3 文法的正確さ
③意味的能力	(言語能力記述文はない)
④音声能力	4 音素の把握
⑤正書法の能力	5 正書法の把握
⑥読字能力	(言語能力記述文はない)

(2) 社会言語能力	
	1 社会言語的な適切さ

(3) 言語運用能力	
①ディスコース能力	1 柔軟性
	2 話題の展開
	3 一貫性と結束性
②機能的な能力	4 話し言葉の流ちょうさ
	5 叙述の正確さ

（「日本語教育の参照枠」 pp. 55-65 を基に作成。通し番号は作成者による）

参考資料②：カリキュラム作成のためのワークシート

2024年1月13日に実施された試行研修のワークショップで使用したワークシートです。

カリキュラム作成のためのワークシート										
2024年1月13日（土） 令和5年度文化庁委託「『日本語教育の参照枠』を活用した教育モデル開発事業」 教師研修モデル開発委員会（事務局：日本語教育振興協会）										
モジュールボックスURL： https://docs.google.com/spreadsheets/d/1-109dfskGoX4TRustkrRfn7XPEMg14kD/edit?usp=sharing&ouid=118239510596019901048&rtfpof=true&sd=true										
自校の教育理念										
卒業時の 学生のイメージ										
コースフレームワーク	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
時間										
学習段階										
参照枠レベル										
10モジュール	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 授業／講義に参加できる										
2 グループでの活動に参加できる										
3 試験対策ができる										
4 面接・面談が受けられる										
5 情報収集ができる										
6 情報発信ができる										
7 問い合わせができる										
8 社交ができる										
9 手続きができる										
10 楽しむことができる										
* オリジナル										
【第○ターム】 3か月間の中で行う学習活動										
10モジュール番号	学習活動	コミュニケーション言語活動	Can do	学習項目等						

参考資料③：参考文献

Can-do Statements 研究会（2018）「Can-do Statements 研究会 活動記録 2012-2017 年度 日本語学校進学予備教育到達目標スタンダードの作成」

日本語教育振興協会（2015）「日本語スタンダード・プロジェクト 報告書」

文化庁文化審議会国語分科会（2021）「日本語教育の参照枠 報告」

文化庁文化審議会国語分科会日本語教育小委員会「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループ（2022）「『日本語教育の参照枠』の活用のための手引」

文化庁文化庁国語課（2013）「『生活者としての外国人』のための日本語教育ハンドブック」

Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. UK: Cambridge University Press.
（吉島茂・大橋理枝 訳・編（2014）『外国語の教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（追補版）』朝日出版社）

Council of Europe. (2020). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment – Companion volume*. Strasbourg, Council of Europe Publishing.

参考資料④：委員一覧

令和4～5年度「日本語教育の参照枠」を活用した教育モデル開発事業【留学】

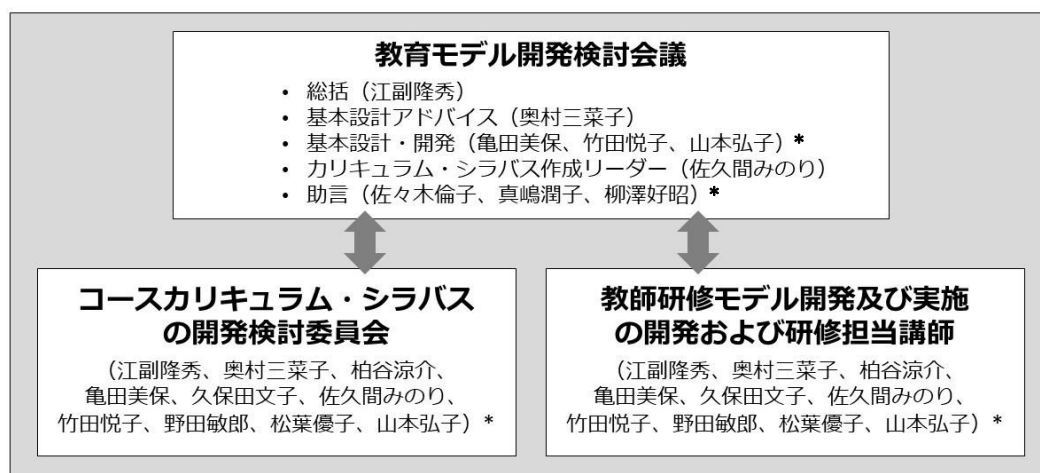
【教育モデル開発検討会議】

江副隆秀 新宿日本語学校 校長
 奥村三菜子 NPO 法人 YYJ・ゆるくてやさしい日本語のなかまたち 副理事長
 亀田美保 大阪 YMCA 日本語教育センター センター長
 佐々木倫子 桜美林大学 名誉教授
 竹田悦子 コミュニカ学院 顧問
 真嶋潤子 大阪大学 名誉教授
 柳澤好昭 NPO 日本言語教育情報センター・代表理事
 山本弘子 カイ日本語スクール 代表
 （敬称略・五十音順）

【コースカリキュラム・シラバスの開発検討委員会】

【教師研修モデル開発及び実施の開発および研修担当講師】

江副隆秀 新宿日本語学校 校長
 奥村三菜子 NPO 法人 YYJ・ゆるくてやさしい日本語のなかまたち 副理事長
 柏谷涼介 セントラルジャパン日本語学校 主任教員
 亀田美保 大阪 YMCA 日本語教育センター センター長
 久保田文子 京進ランゲージアカデミー京都中央校 教務主任
 佐久間みのり 横浜デザイン学院日本語学科 教務主任
 竹田悦子 コミュニカ学院 顧問
 野田敏郎 国際ことば学院日本語学校 校長
 松葉優子 浜松日本語学院 校長
 山本弘子 カイ日本語スクール 代表
 （敬称略・五十音順）



（*五十音順）